木のものつくりの魅力を伝えるワークショップ

ー言葉ではなく、体感をもって伝えるー

森と木のクリエーター科　木工専攻　坂野 幸太

１．背景

①私は子どもの頃、よく近所の空き地に行って、どろだんごを作っていた。土と水を混ぜて、手で球体をつくり、そこに、きめの細かい乾いた砂をかけて、余分な砂を手でやさしくなで落とし、磨き、また砂をかけて、なでて、磨くということを、ひとり黙々と日が暮れるまで繰り返していた。そのような子ども時代を過ごした私が、会社組織の中で働くサラリーマンとして生きていたとき、休日にある体験をしに美濃市を訪れる。その体験はグリーンウッドワークである。木の感触がオノを伝って手へ、振動となって伝わってくる。

素材の感触を手で確かめながら、目の前の１つのものに没頭し、かたちにしていく感覚が、子どもの頃のどろだんごづくりに似ていた。この体験が、きっかけで、木工作家になりたいと思うようになり、アカデミーに入学した。

②木工作家を名乗るのは簡単である。しかしそれを生業にして続けることは難しい。そこで、現役木工作家が何を思って制作を続け、生業としているのか知るためにインタビューを実施した。そのなかで特に印象的だったのは、「リアルな場での人との出会い、つながりを大切にする」という内容である。直接人と会って時間を共有することで、SNS よりも、作品とその制作の背後にある情報を伝えやすいのではないかと考えた。

これら２つの経験から、「木のものづくりの魅力を伝えるワークショップ」が研究で取り組む内容として、適当ではないかと考えた。

２.目的

作品の背後の情報である、「ものを作る上で大切にしていること」を、言葉ではなく、つくることを通して体感をもって伝えること。そして、その大切にしていることに共感してくれる人を１人でも多く増やすこと。

３．方法（木工ワークショップの内容の決定）

つくるもの：スプーン（樹種はヤマザクラ、あらかじめ匙面を仕上げてあるものを用意）

加工方法：南京鉋

固定方法：削り馬による固定

塗装：クルミ油

時間；1 時間（１回目・２回目）

２時間 30 分（３回目・食事時間込み）

料金：1,000 円（1 回目・２回目）

4,000 円（３回目・食事代込み）

定員：各回４名

集客方法：インスタグラム広告

４．実践内容

ワークショップで伝えたい、ものを作る上で大切にしていることは以下の６つである。

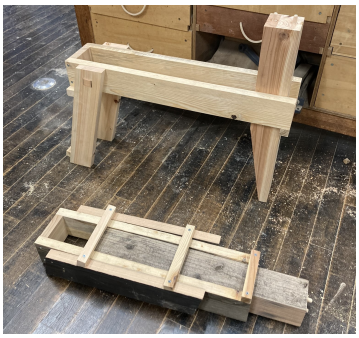
①　制作環境

制作環境が大切だと自覚したのは、奈良の木工作家、梅田俊一郎さんの自宅兼工房を訪問したのがきっかけである。玄関を入ると、あめ色になったフローリング、窓越しにみえる奈良の里山の風景、ひきたてのコーヒーの香りがしており、心落ち着く空間が広がっていた。作り手が心身ともにリラックスした状態でつくることが、いいものをつくることにつながるのではないかと実感した。今回のワークショップの会場もその点を意識して選んだ。

②　刃物で仕上げること

自分が作品を仕上げるときは、必ず刃物で削って仕上げている。その理由は木の存在をよりはっきりさせるためである。刃物で削ると、やすりで削った面よりも数倍きめ細かく仕上がる。そのため、木のもつ色や木目模様がより鮮明になる。また削った際にできる刃物跡の稜線が木の硬さをつたえてくれる。そのためワークショップでは稜線を作りやすく、安全に気持ちよく削れる南京鉋を加工の道具として選んだ。

③　削りやすさ



削りやすさを決める要点は、大きく２つある。１つ目は刃物の切れ味。２つ目は材料の固定である。今回のワークショップでは、特に後者を工夫した。一般女性や、教員にモニターテストを実施し、検討を重ねた結果、小型化した削り馬「削りロバ」と、ナイロンバンドで固定する方法を採用することにした。

④　よく見ること

作品の制作のときは、加工前の塊の状態をよく見ることにしている。年輪を見て、ゆっくり育ったのか、早く育ったのか。成長方向の面を見て、魅力的な木目模様がないかをみる。加工中はバランスの良いか

たちになっているか、この木のどこを見せたいのかを見ている。その訓練となったのが、毎朝学校で行っている５分クロッキーの活動である。クロッキーは物を見ていかにたくさんの情報をインプットし、その情報を手で描いて正確にアウトプットするかが絵の出来を左右する。これは木工においても同じことである。ワークショップ中は参加者にも削りながら、薄さや形のバランスをよく見るよう声かけを行った。

⑤　静穏さ

静穏さは作品の良し悪しを判断する１つの基準となっている。なので、木の存在感が強く表れすぎて荒々しくならないよう、木のどこをつかうか注意し、また野暮ったくならないよう、薄さのバランスを意識している。そしてワークショップでこの静穏さを表現するために２つの工夫を行った。

１つ目はアンビエントミュージックと呼ばれるジャンルの音楽を BGM として流すことである。歌声がなく、その場に漂う空気のような、静かで、穏やかな曲調が特徴である。また静穏さを表現するだけでなく、参加者の集中力や没入感を高める目的もある。

２つ目は広告写真である。写真の構図や、色味、フォントを工夫し静穏さを演出し、当日のイメージを前もって伝えることにした。

（写真１：ミノマチヤマーケットで行ったワークショップの広告写真）

⑥　おいしいものを食べる

現役木工作家へのインタビューで、岡山県の木工作家さかいあつし氏から以下の言葉をいただいた。「食べ物を変えると、感性も変わる」「おいしいものを食べると、細胞が喜ぶ。細胞が喜ぶと気が満ちる。気が満ちると感性が高まる。」という内容であった。インタビューの際、さかいご夫妻の作った料理をいただいたのだか、素材ひとつひとつの味や香りがして、とても美味しかったのを覚えている。常に感覚が研ぎ澄まされた状態でいることが、作品をつくるうえでも重要なことであると理解した。そこで３回目のワークショップは本格インドカレーで有名な美濃市駅前カフェ灯家さんとコラボレーションし、「本格インドカレーを削りたて桜スプーンで食べる」という企画を考えた。これらの点をふまえて以下の日程でワークショップを行った。

・2022 年 11 月 13 日　スプーン削りワークショップ１回目（場所：ツバメ貿易）

・2022 年 12 月 3 日・４日　スプーン削りワークショップ２回目（ミノマチヤマーケットに出展、場所：WASHITA MINO）

・2023 年 1 月 28 日　スプーン削りワークショップ３回目（美濃市駅前カフェ灯家）

（写真２：３回目のワークショップの様子）

５．まとめ

ワークショップ終了後、インスタグラムを通じてコメントをいただいた。「楽しかったです。ありがとうございます。」「木を削ってスプーンが仕上がっていく時間に癒されました」「今後も素敵なものをつくって、頑張ってくださいね」など、木のものづくりの魅力が伝わっていることが伺えた。と同時に、人との出会いのありがたみを感じた。

ものをつくることは、自分と向き合うことでもある。求めている正解は、外にはなく、自分の中にしかない。自分にとっての正解を探し続けるというのは、楽しいばかりではなく、迷いや、葛藤のある辛い道のりであろう。そういった意味では、このワークショップの取り組みは、そういった迷いや葛藤から抜け出す一つの方法の１つではないかと感じた。夢中になって木を削る参加者を見ていると嬉しくなった。

６．今後の展望

卒業後は、木工作家として起業する。作品制作と並行して、今回のワークショップのように、作品の背後にある情報に共感してもらえるような活動を行う予定である。